

#### 4) サーモグラフィ

サーモグラフィは物体の表面の温度の分布を表現し、乳癌を診断します。乳癌は代謝の程度が高く、高温であり、その直上の皮膚温度が高くなることを利用したものです。空港などで新型インフルエンザの検疫で体温を測る機械がよくテレビにでますが、その精密なものです。診断率はマンモグラフィーやエコーに比べて低いですが、悪性の予後不良の乳癌を検出できるといわれています。

#### 5) 乳頭異常分泌の細胞診、乳管造影法と乳管鏡検査

乳頭異常分泌（乳管口から授乳時以外に分泌物がでること）、とくに乳頭出血がある場合には、その乳管内に乳頭腫などの良性腫瘍や癌があることがあります。まず、分泌物の細胞診と潜血反応を行います。腫瘍の疑いが強い場合には、乳管造影を行います。これは異常分泌のある乳管口から少量の造影剤を注入して、マンモグラフィーを行い、腫瘍の位置、性状を確認します。

乳管鏡（乳管内視鏡）検査は乳管口から小口径のファイバースコープを挿入し、乳管内を観察、腫瘍病変の生検を行います。

#### 6) 穿刺細胞診

腫瘍に直接、細い注射針（21-22G）を刺して、腫瘍の組織を吸引し、採取し、スライドガラスの上に吹き付けて、固定液で固定します。これらを染色、検鏡して悪性であるか否かを診断します。小さな腫瘍や石灰化のみの場合には、超音波のガイドの下に穿刺を行うことにより、より正確に腫瘍組織を採取できる可能性があります。

穿刺細胞診の際に注意すべきは、癌細胞が陽性の場合には確認できますが、陽性の判定が困難であることがあります。また、陰性、擬陽性の時には、腫瘍細胞が十分に採取できない、腫瘍の性格（癌細胞が少ない、異型の弱い細胞の存在）などの理由で、癌の存在を完全に否定できない（擬陰性）ことが起こります。